東欧行政視察記

おとぎの国―ギリシャ―
徹底した基盤整備　東独

〈その五〉

横芝町長　佐瀬　哲司

ギリシャの首都アテネ市の二日目の朝を、ホテル『ロイヤル・オリンピック』で迎えた。午前六時というのにバスや自動車が通勤客を運んで走っている。この国は暑く夏時間を適用しているため、朝のラッシュは日本よりは早いようだ。

今日は一日船で、エーゲ海に浮かぶ島めぐりの旅である。出発地のピレウス港は地中海の要港でエーゲ海クルーズの起点であり、映画『日曜はダメよ』の舞台になったところとのことである。

港には観光船、貨物船、大型ヨット、モーターボートなどたくさんの船が繋留されており、我々一行の乗った船は約三百人のお客を乗せ、静かに出航した。

乗客はヨーロッパ人、アメリカ人が九〇%を占めており、日本人は我々のみであった。海はまっ青で海底がはっきり見え、本当にきれいだと感心した。

第一の寄港地であるエギナ島に上陸した。港に沿って土産物店が五〇～六〇戸並び、丘の頂上まで所せましと段々畑のように家が建てられ、まるで絵に画いたおとぎの国にでも来たような眩惑を感じさせる風景であった。

外気は三〇度ぐらいの暑さのため、全員帽子を買い求めた。土産物は革製品、綿製品、絹織物、花ビン類などを並べてあり、同じような店がいくつも並んでいた。

美しさに酔う　島めぐり

第二の寄港地イドラ島に向かう途中、ギリシャの軍艦三隻と出あい、地中海も波高しの感を抱いた。この島の港には、立派な大型ヨットが繋留されていた。数々の映画の舞台になったところとの説明があったが、本当に日本では見られないようなギリシャ的な美しさに酔った。島の交通機関は坂が多いのでロバを利用しているとのことだった。

島めぐりの旅も終わり、アテネ市郊外の小さな漁港のほとりのレストランで、海を眺めながらの夕食をとった。食事は魚類が少いため期待していたような料理ではなかった。

いよいよ明日はアテネ市ともお別れだと思い、夜の市内の散策に出かけたが、東京のような盛り場や観楽街はあまり目につかなかった。

厳重な監視　東ドイツ

翌日、ギリシャに別れを告げ再びアテネ空港からソ連製の航空機アエロフロート六六〇便に搭乗する。二時間ぐらいで東ドイツ民主共和国の首都東ベルリン付近の上空にさしかかった。

大きな湖が数多く見られ、森林と耕地が絵に画いたように区画され、基盤整備が整然となされていた。また森林は、日本では到底見られないほど広い赤松であり、道路も林道も基盤の目のようになっており感心させられた。

飛行場の建物は二階建てで、屋上に百人ほどの人々が見送りや出迎えに手を振っていた。共産圏のお国柄で建物の内部はモスクワ空港と同様に暗く、入国検査は一番チェックが厳重であった。

空港の外に出ると、まず駐車場に新しい自動車が数百台駐車されているのに驚かされた。さすが共産国ではソ連についで工業生産力をほこる東ドイツだなと痛感した。

バスは三〇人乗りの古いマイクロで、ガイドは現地人の二十五歳ぐらいの女性であった。英国のケンブリッジ大学へ留学して現在は政府の観光局の役人との事で、愛嬌のある美人であった。しかし日本語が全然駄目なので通訳として、音楽の学術研究のために留学しているという在独六年の大阪出身の日本女性が一緒に案内することになった。

先のドイツ女性は政府より派遣された役人で、自由主義国の人々が東ドイツ人と接触したりするのを監視したり、軍事秘密をスパイしたりするのを監視する役目のようであった。

広大な　営農規模

私たちのバスは、約一時間かかるというポツダム市へと向かった。道路の両側は整然と整備された大型農場と赤松と白樺の森林が見受けられ、畑には小麦が青々と茂っており、ヨーロッパ農業の経営規模の大きさには全く驚かされた。日本の農業などとはまるで比較にならない。

郊外の農家の建物も新しく、庭には立派な樹木が植えられており、外見ではブルガリアの農家と比較にならないほど豊かに感じられた。

ポツダム市に近づくにつれ、高層住宅街や工場などが見えてきた。ポツダム市は人口一三万人の都市で、政府の高級役人の住宅地とのことで、静かな市街地を形成していた。

私たちのホテルは、大きな河のわきに建設された新しい一九階建てのエンターホテルポツダムという名で、内部はユースホテル式のもので部屋もせまかった。ホテルの受付は女性一人でやっているため、お客で混雑して一時間も待たされた。

本当に共産圏の国は、すべてが非能率的でサービスはあまり考えないお国柄のようだ。

――つづく

おとぎの国を思わせるエギナ島